

昭和女子大学教職課程研究報

# EduMate

vol. 6

**【特集】SDGsと学校教育**

**食べものから資本主義経済を学ぶ**

**SDGs6（安全な水と衛生）からの探究の広がり**

**専任が語る**

**女性教師はなぜ退職しなけりばならなかつたのか？**

**「山月記」そして、もう一つのドラマ**

**学びにおける豊かさとは？**

**教育の最新事情**

**中教審答申「令和の日本型学校教育」（2021年1月26日）を読み解く**

## 【特集】SDGsと学校教育

食べものから資本主義経済を学ぶ

SDGs 6 (安全な水と衛生) からの探究の広がり

↳静岡県立三島北高校の学びから

3

## 専任が語る

女性教師はなぜ退職しなければならなかったのか？

― 「教員のワーク・ライフ・バランス」と「キャリア教育」をめぐる―

「山月記」そして、もう一つのドラマ ↳李徴の思いをカラダで感じてみたい

学びにおける豊かさとは？ ↳Web検索を超えて

9

11

13

## 教育の最新事情

中教審答申「令和の日本型学校教育」(2021年1月26日)を読み解く

15

## 先輩はもがく、されど進む

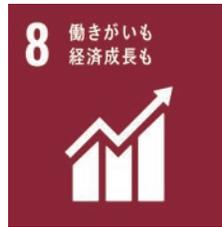
私立 中学校・高等学校 堀内夏穂先生 (国語科)

17

昭和女子大学教職課程研究報

# EduMate

vol. 6



## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

### SDGsと学校教育

私たちの、そして、地球の未来はユートピアなのでしょうか？ それともディストピアなのでしょうか？ 2015年9月の国連サミットにおいて、「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」が採択されました。地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」という理念のもと、持続可能な共生社会の実現が期待されています。人為的な気候変動、食糧危機、水危機、エネルギー消費量の激増、貧困や格差の深刻化など、世界は待ったなしの状況下にあります。行動を起こす時は「いま」です。

では、学校教育は「SDGs」どう向き合っていけばいいのでしょうか？ 学習指導要領の改訂に伴い、教科書も新しくなりました。多くの教科書会社がSDGsに関するコンテンツを意識的に取りいれています。それらをどう取り扱うかが鍵を握ります。学校における学びの場と機会において、様々な現実世界を取り上げながら、大人が築いてきた国家や社会、科学、生活などを批判的吟味にかけて、それらを創造的に再構築する未来決定の自由を子どもたちに認める、そうした学びが求められると私たちは考えています。

SDGsを一過性のブームで終わらせてはいけません。他方で、SDGsとそれに関する取り組みを鵜呑みにしてもいけません。私たちはどのような社会を望むのか、そのために何をどうしていけばいいのか、私たち一人ひとりの、さらにはお互いのあり方生き方が問われています。ひとりごちる夢はただの夢、みんなでみる夢は現実になる。専門家の知恵を手がかりにして、みなさんとこれからの学校教育を探究していければと思います。



【特集】

# 食べものから資本主義経済を学ぶ

## 1. 政治経済への二方意識

多くの学生は「経済」や「歴史」は難しいと二方意識を持って大学に来るようです。そこで私が「食べもの」から授業を始めると、「食べもの」と経済がつながっていたなんてビックリ!とコメントしてきます。高校までの社会系の教科書を見ると、子どもたちのイラストを使って、少なくとも消費

者としての生徒と経済とのつながりを教えようとしている様子は見られません。現場の先生方も努力されていることでしょう。それでも、学生たちはやはり政治や経済とは自分からは遠い「他人事」と捉えている様子。そんな学生たちが大学で経済学や経営学を学んでも、やはりどこか自分とは切り離された別世界に感じたまま知識として学び、だから自分の身の回りの政治経済には関心薄いまま主権者になってしまっているのではないかと懸念しています。

## 2. 危機を担って生きる若者たち

その若者たちが生きる現代世界では、学生たちも大好きな安い食べものや安い衣服が地球も社会も壊していると批判されています。工業的農業・畜産業や食料システムが気候危機の一大要因との認識が広がり、「環

境のために」肉食を減らしたり菜食に切り替えたりする人も増えていきます(少なくとも海外では)。また「ファストファッション」に代表される衣服の大量生産・大量消費が、環境にも生産に関わる人たちにも、大きな負荷を与えていることも知られていきます。グレタ・トゥーンベリさんに代

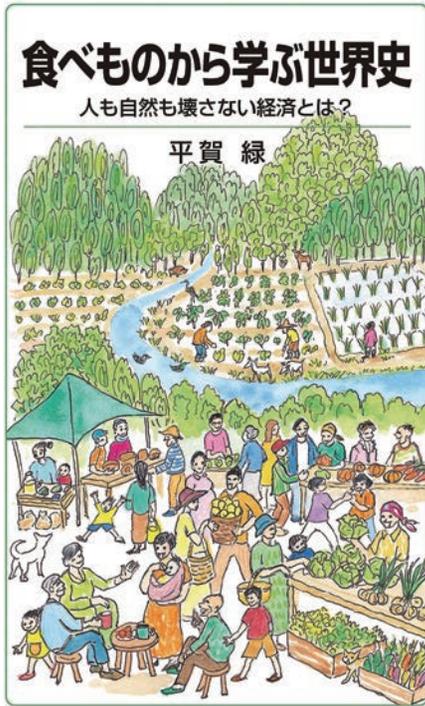
表されるように、海外の若者たちが自分の未来のために闘う姿は日本のニュースでも見られるようになりました。日本にも声を上げる若者がいないわけではありませんが、やはり私が普段接する学生たちの多くは「地球温暖化」もどこか遠い二酸化炭素の話と感じており、SDGsは聞いたことあるけれどという感じ。そして何か、多くの学生が、食料問題というと食品ロスに、環境問題というとプラスチック問題に関心あるというのです。あくまで関西圏の大学で非常勤講師を数年務め、今年から本務校に着任した私の限られた経験ではありますが、

## 3. 食から政治経済を感じる

そこで私は、大学の講義を、学生たちにも馴染みのコンビニのお握りから始めています。実際にお握りを手に学生たちの前に立ち、このお握

りを売っているコンビニでそこで働く人たち、お握りを作る企業とそこで働く人たち、遡ってコマや梅を育てる農家たち。こうして、お握りの背後につながる、生産から製造加工、流通、小売、消費までのサプライチェーンを実感してもらいます。

また「今日の食費は500円しかない。どうする?」と1日のサバイバル法を書き出してもらいます。学生たちは「朝にコンビニのお握りを1個買って」などやはりコンビニ中心に1日をしのぐ方法を考え、500円のやりくり方法を考える人が多い。なかには「バイトしてまかないを食べる」とか、「寝て時間を潰す」とか答える学生もいます。そこで、お金、労働力、時間という限られた資源からどうやって最大の効用を生み出すかという、「経済学とは、社会がその希少な資源をいかに管理するのかを研究する学問」と経済学の基礎を話します。さらにはお握りの表と裏の表示を見せたり、輸入されたであろう具の話をしたりして、その食品表示のルールや貿易政策を決めている政治の関わりを話し、そこから企業を中心とする経済活動と政府の策を分析する政治経済学を説明していきます。そんな授業の感想としてよく言われるの



「食べものから学ぶ世界史 人も自然も壊さない経済とは？」

平賀緑著、岩波ジュニア新書、2021

が、冒頭であげた「自分が食べるモノが経済とつながっていたなんてビックリ！」でした。

#### 4. 食をめぐる社会科学の研究

私は専門分野を尋ねられたら、冗談半分で「おいしくない食べものの政治経済を研究しています」と自己紹介します。長年、市民社会で食と農と環境の問題に取り組んだ後に、「食」から人の健康と地球環境と社会正義に取り組むというロンドンの研究所で修士号を取り、その後、京都大学経済学研究科で「食」をめぐる政治経済学を学び、非常勤講師のころから食と資本主義の歴史を講義し始めました。まさか自分が「資本主義」を語ることになるとは思いませんでした。

版しました。なぜ、こんな世界になっ

した。でも、現在の食料農業における様々な問題、格差社会や地域の崩壊、気候危機などの問題に取り組もうとすると、その根底にある「資本主義」の成り立ちとカラクリから理解する必要があります。なぜなら、私たちが面している食、農、環境、健康、格差、地域などの社会問題は、資本主義という基盤がゆえに発生し、人も自然も切り捨て利潤を追求するという資本主義のカラクリとしては真つ当に機能している成果とも考えられるからです。

これらへの考えに基づき、2021年夏に『食べものから学ぶ世界史』として、学生や一般市民向けに「資本主義」を解き明かすジュニア新書を出

てしまつたのか。身近な食べものから資本主義経済の成り立ちとカラクリを学べば、人も自然も壊さない「経済世帯」が見えてくるだろうとの願いを込めて。

#### 5. 資本主義経済の歴史を学ぶ

このジュニア新書のあらすじと、この本に込めた願いとを、少し紹介させてもらいます。これも学生向けに授業するときには、11月11日「ポッキーの日」の翌日に、ポッキーから産業革命以降の世界史や、明治150年の日本経済の歴史を授業するなど工夫しています。原材料に含まれている小麦粉、砂糖、カカオマス、植物油。そしてアレルギー表示されている大豆

と、江崎グリコ創業の背景。これらを取り口に経済の歴史を語り、少しでも自分たちと経済との繋がりを感

じてもらうために。  
まず、産業革命と資本主義の始まりを語る「砂糖の世界史」については、聞いたことがある学生もいるようです。アフリカの人たちを「商品」として奴隷貿易し、カリブ諸島のプランテーションで砂糖を大量生産し、それをヨーロッパに輸入して工場で働く労働者の胃袋を安く手取り早く満たす食料にした。こうして新大陸

の自然や社会と、旧大陸の労働者の生活や健康とをポロポロにしながら、一部の商人や資本家が富を蓄えて産業革命を推進し、世界を率いる「先進国」となつていったことを語ります。

やがて舞台をアメリカに移し、世界恐慌から2度の世界大戦を経て、需要を確保しながら大量消費を促す資本主義の黄金時代を「デブの帝国」から語っていきます。小麦やトウモロコシや大豆を大量生産するようになつて、それを人間の胃袋のキャパを超えて食べさせるために、いろんな糖分や油脂や加工食品を開発し、畜産業を工業化・大規模化して、海外にも市場を広げていった。それと平行して、欧米の「先進国」の経済成長を支え

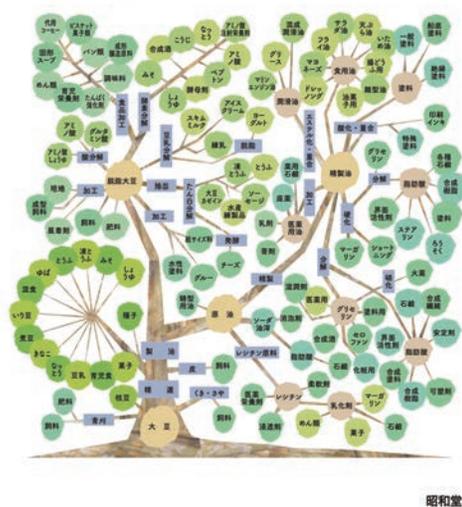
つつ飢えていった「世界の半分」について。  
ポッキーにアレルギー表示のある大豆からは、近代以降の日本について、私の本領である植物油の政治経済学から解き明かしていきます。開国直

後になだれ込んできた「メリケン粉（アメリカから輸入された機械製粉の小麦粉）」や「洋糖（輸入砂糖）」と、これらを使って始まつた日本の近代的製菓産業について。そして満洲の大豆を搾油することで始まつた日本の近代的製油産業について。だからポッキー

# 植物油の政治経済学

大豆と油から考える資本主義的食料システム

平賀 緑 著



昭和堂

『植物油の政治経済学 大豆と油から考える資本主義的食料システム』  
平賀緑著、昭和堂、2019

の植物油脂にも大豆が入っているだろうし、乳化剤、ショートニング（原料）、全粉乳（牛のエサとして）など、姿の見えないところにも大豆が関わるようになった。大豆とは、アジアの伝統的な食糧というより、多種多様な工業製品を作り出す製造業や化学工業の工業原料に変わってしまった。この話には、私の博士研究をまとめた『植物油の政治経済学—大豆と油から考える資本主義的食料システム』（2019年）の表紙も見せながら、大豆という大木が、油と脱脂大豆に枝分かれし、多くの成分に枝

分かれて多種多様な食品・非食品になるカラクリを紹介します。

## 6. 食から世界を変える力

この小さなジュニア新書を通じて、学生や若者に伝えたいメッセージを

2つまとめてみます。一つは、多くの若者が感じている「生きづらさ」は、個人の力不足や責任だけではなく、構造的に作られた部分も大きいということ。人や自然や地域の豊かさを吸い上げながら利潤追求するカラクリの中で、格差を広げ多くの人びとを弱体化するカラクリの中で、生きづらくするのは当然のこと。こんな資本主義システムの中に生まれ育ちながら、私たちはこの資本主義について学ぶことがほとんどない。首相がいきなり「新しい資本主義」を提唱しても、新しいうぬぬんを議論する前に、そもそも資本主義がどう形成されてどう変わってきたのか。いろんな繋がりが切り離されてしまった若者たちが、自分をこれまでの歴史の中に位置づけ、自分を押しつぶしそうな世の中の構造を理解することで、自分の足場を固め、そこから今後どう生きるべきかを考えて欲しいのです。そのためには、この世界のオペレーティングシステムともいえるべき資本主義がどんなカラクリで動いているのかを、理解することが必須でしょう。

二つ目は、オペレーティングシステムといいながらも、資本主義は不変のシステムではないということ。人類の歴史の流れで見れば、資本主義が

主流になったのはせいぜいここ数百年のこと。日本では明治以降150年に満たない動きです。なにもいきなり資本主義をやめると主張するつもりはありません。そんなことを言っても学生たちは「自分一人では何もできない」と思うだけでしょ。そこで私は、まずは自分でお茶を淹れることから、自分の毎日のご飯から、お金の世界を抜け出して、地域に根ざした食と農を見つけて出すことを誘っています。小さなところからでも「変えられる」ことを実感してもらえたら。お茶やご飯から広げて、自分が繋がる経済社会を変えていけるのだと気付いて動き始めてもらえたらと願っています。

食べものから資本主義経済の歴史を学ぶことで、なぜ、こんな世界になっちゃったのかを理解してほしい。その上で、気候危機とパンデミックをかかえてこれからの世界を生きる学生たちに、人も自然も壊さない「経済市民」を考えてもらえたらと願っています。

【特集】

# SDGs6(安全な水と衛生)からの探究の広がり

## ～静岡県立三島北高校の学びから～

### 1. SDGsに通底する水

私は水や環境をテーマにした探究的・協働的な学びに取り組んできた。もともとジャーナリストとして世界各地の様々な水問題を取材していたが、2002年4月に「総合的な学習の時間」がスタートし、ある小学校の校長から「見聞したことを話して欲しい」と依頼された。「アフリカには毎日3時間もかけて水をくみにいく人がいる」、「バングラデシュにはヒ素に汚染された水を飲まざるをえない人がいる」などと写真を見せながら話をしたが、「外国にはかわいそうな人たちがいるのですね」という反応だった。聞いた子どもたちにとっては、知らない国の知らない人の話、自分とは関係ないという感想だった。私はそれ以降、説明よりも気づきを大切にしようと考えた。大学で研究したり、JICAの事業で実践したりした。

ここでは静岡県立三島北高校で探究的・協働的な学びを支援した経験をお話していきたいと思う。同校は、文科省の「スーパー・グローバル・ハイスクール」(SGH)プロジェクトに参画した(2015～2020年)。目的は、社会課題に対する関心、コミュニケーション能力、問題解決力な

どを身につけ、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成すること。課題研究テーマはそれぞれの高校に任せられるが、同校は「水」を選択し、1年生は「地域の水問題」、2年生は「海外の水問題」の解決方法を考えた。

SDGsの17の目標のなかに「安全な水とトイレを世界中に」(目標6)があるが、水は他の目標とも関連する。たとえば「貧困をなくす」(目標1)には水が必要だ。開発途上国の水不足の地域では、水汲みに多くの時間を費やさなくてはならないので働くことができない。「飢餓をゼロに」(目標2)は水をどのように利用するか

がガギを握っている。なぜなら世界の淡水資源の7割は食料生産につかわれており、水不足が進行すると食料生産はむずかしくなる。この問題に日本は深く関係している。私たちの食卓に並ぶ食料をつくっている水はほとんど他国の水だ。企業が生産にかう原材料も他国の水でつくられる。「すべての人に健康と福祉を」(目標3)にも水は欠かせない。水が媒介する病気によって、毎日約2000人の子どもが命を落としている。「質の高い教育をみんなに」(目標4)、「ジェンダー平等を実現しよう」(目標

5)も水と関係している。開発途上

国では女性や少女が毎日水くみに行くケースがある。家と水源を数時間かけて往復するため、仕事や学校へ行く時間がなくなる。「住み続けられるまちづくりを」(目標11)、「気候変動に具体的な対策を」(目標13)も水に関係する。気候変動は「水のすがた」を変える。水には「恵み」の部分、「脅威」の部分がある。日本でも近年、豪雨災害が頻発しており、まちづくりを根本的に考え直す必要に迫られている。水を入口として、地域や世界の課題を考えていくことができる。

### 2. 気づきと興味の大切さ

まずは水辺を歩く。大岡信の『産卵せよ富士』という詩に、「ぼくは知ってる きみの体の内側の 玄武岩溶岩層の 隙間を縫って ピシャリ ピシャリ 滴り落ちる地下水の ある水脈は 百年以上の歳月ののち 麓の街に やうやくにして辿りつくだ」とあるように、富士の山肌から吸い込まれた雪解け水が、長い時間かけて、ここに湧き出している。地域の人にも話を聞く。「富士山の神様はコノハナノサクヤビメという水の神さま。三島大社に祀られているのは、コ

ノハナノサクヤビメのお父さんのオオヤマツミ。娘がお父さんに水を送っているみたい」などと聞き、生徒は次第に興味をもっていく。

導入期には「プロジェクトWET」の体験型アクティビティを行った。たとえば「地下水を知ろう」というアクティビティでは、生徒は調査会社のメンバーになって架空の地域の地質、地盤、地下水を調べる。地域全体を見回すと、ある地区で過剰な汲み上げをしており、そこを中心として地下水位の低下や地盤沈下が起こっていることもわかる。

「水差しを回そう」というアクティビティでは、生徒はある流域で事業を営む人をロールプレイする。たとえば淡水魚の養殖業者、ペットボトル水工場や半導体工場の経営者、稲作農家、果樹園農家、水道事業者、製紙業者などになり、川の水や地下水の水を使う疑似体験する。ガラスの水差し（見えるので川の水を表す）と水筒（見えないので地下水を表す）に入った水を上流に位置する事業者から順番に使い、下流の事業者へまわす。たとえば、ペットボトル水工場なら水筒から自分の器へコップ2杯の水を移し、次の人へ水筒を渡す。稲作農家なら水差しから自分の器へ

コップ5杯分の水を入れ、その後、水差しへコップ2杯分の水（田んぼから用水路を経て川へ戻った水を表す）、水筒へコップ一杯分の水（田んぼから地下へ染み込んだ水を表す）を戻す。上流の事業者が過剰に使うと水は減り、下流の事業者は水が使えなくなる。生徒たちは、アクティビティを体験することで、さまざまな視点を獲得する。

深く考えることで課題は進化させる。あるチームは最初、豪雨災害が頻発している状況から「豪雨災害をなくす」を課題とした。だが、すぐ行き詰まった。豪雨災害をなくすことは難しい。「本当の課題は何か」と再考し、「豪雨時にいかに被害を減らすか」に変わった。近年の豪雨災害について調べ、どうしたら被害を抑えられたかを分析し、情報の伝達や避難の重要性を知った。さらに地域の人にヒアリングし、チームで話し合った結果、「豪雨災害が起きたときに、低所で一人暮らしをする高齢者や障害者をいかに避難させるか」を課題にした。

課題は質問によって深まる。チームでいろいろな質問をし合い、全員で質問に答えていくことができると、定期的な振り返るために、質問カードをつくらなければならない。カードは「こ

### 3. 問いが課題を進化させる

深く考えることで課題は進化させる。あるチームは最初、豪雨災害が頻発している状況から「豪雨災害をなくす」を課題とした。だが、すぐ行き詰まった。豪雨災害をなくすことは難しい。「本当の課題は何か」と再考し、「豪雨時にいかに被害を減らすか」に変わった。近年の豪雨災害について調べ、どうしたら被害を抑えられたかを分析し、情報の伝達や避難の重要性を知った。さらに地域の人にヒアリングし、チームで話し合った結果、「豪雨災害が起きたときに、低所で一人暮らしをする高齢者や障害者をいかに避難させるか」を課題にした。

課題は質問によって深まる。チームでいろいろな質問をし合い、全員で質問に答えていくことができると、定期的な振り返るために、質問カードをつくらなければならない。カードは「こ

自分やチームの現状は？	ゴールは？
① うまくいっていることは何ですか？	① あなたのゴールはなんですか？
② うまくいっている理由は何ですか？	② あなたは、誰を、どのようにハッピーにしたいですか？
③ どうすればもっとうまくいきますか？	③ なんのためにゴールを目指していますか？
④ 次はどうしますか？	④ ゴールに到達したら、あなたはどんな気持ちになりますか？
	⑤ ゴールの達成はどう計りますか？
解決策は？	手持ちの道具や協力者は？
① 問題のどの部分を解決したいですか？	① 必要なもののリストはありますか？
② いつ、誰が、どのようにやりますか？	② 必要な時間はどの確保しますか？
③ ドラえもんならどんな道具で解決すると思いますか？	③ これまでの経験や方法で使えるものはありますか？
④ 30年後に解決するとして、20年後、10年後はどうなっているとよいですか？	④ 誰に協力してもらいますか？
	⑤ この分野の先人はいますか？

質問カードの例

ルを聞く質問」、「行動をはっきりさせる質問」、「優先順位を決める質問」、「これまでを振り返る質問」など16枚ある。これを中央に伏せておいて、メンバーが1枚ずつめくり、チームで回答する。目的を確認し、現状を把握し、これからどうしたらよいかを考える。質問が技として身につければ、自問自答して難局を切り抜けることもできるし、チームの活動に深みを与えることもできる。

学習の成果はさまざまな形で発表する。発表会のよさは見ず知らずの人に質問されることだ。問題の背景やチームの活動経緯を知らない人は、新鮮な質問をたくさんしてくれる貴重な存在だ。

オープンスクールでポスターセッションを行った際、あるチームはエッチオピアの水不足の集落で水を運ぶ道具を披露した。廃自転車を活用し、タイヤのスポークとスポークの間に水を入れる水筒のような容器を装着すると、1つのタイヤで8リットルの水が運べる。ゴムタイヤなので急峻な岩山や砂利道にも対応可能。披露されたのはタイヤ4つを組み合わせた装置で32リットルの水が運べた。水汲みの労働は軽減され、貧困やジェンダーの問題の解決まで視野に入れた。参

加者からは、「自転車のタイヤを加工する道具や技術は現地にあるのか」、「この装置を売るのが、それともこの道具を使って水くみを商売にするのか」などの質問が出た。いずれも新鮮な質問であり、生徒たちは新たな課題を得ることができた。

#### 4. 学んだことを地元へ発信

最終的には、自主的に小学校への出前授業を行うチームが現れた。カンプジアのトンレサップ湖周辺に住む人たちの「水と衛生事情」を疑似体験できるボードゲームを開発し、自分の母校（小学校）と交渉し、ワークショップを実施した。チームは授業の効果について児童の保護者にアンケートをとった。児童が帰宅後に授業について語ったか、どのようなことを語ったか、配布した資料はわかりやすかったか、など数値データで測定し、改善点を報告した。

高校生がファシリテーター役を勤め、市民向けのワークショップを行うチームもあった。自分たちで考案した授業（「街のグリーンインフラを見直す」、「バーチャルウォーター（製品をつくる）ときにつかっている見えない水」を考える）、「水質に応じた水利用を考える」を行った後、参加者と「地

域にはどのような水に関する問題があると思うか」、「その問題に対して自分はどういうアクションを起こすか」について話し合った

高校生一人一人がきちんと考え、自分の言葉で話していること、持続可能な社会を自分たちでつくっていくという姿勢を見せたことで、参加者した大人も楽しみながら真剣に考えることができた。

#### 5. 経験した生徒の声

探究型の授業を経験した生徒に自分自身の変化について聞いた。

「以前は100%正しいと思えることしか言えなかったけれど、素朴に意見や疑問を言っていて、いろいろな意見を集めて、よりよくしていけばいいと思えるようになった。異なった意見でもコミュニケーションによって進化する。自分が正しいとか正しくないとかではなくて、いろいろな意見を持ちよって課題解決すること大切だと思う」

「セッションに参加してくれた人から質問され、以前はきちんとした答えができるかと不安だったり、変な質問をされないかと怖かった。でも、この場で質問にきちんと答えることができてじゃない。自分たちが考えもつかなかった新しい発想をもちよって、課

題を解決していくことが楽しくなった。だからもっといろいろな人の意見を聞いてみたい」

「友達の意見や質問をもらいながら、知識が増えたり、視点が変わったりして、すごく新鮮だった。自分が考えて、行動していけばまわりの景色がどんどん変わる。でも考えや行動が停滞しているときはつらい。しばらくしてから、そういう「もやもや」も大事なんだって思えるようになった。反射的に答えをだすことがすべてじゃない。「もやもや」を抜けた時に必ず何かがある。私たちはたまたま水をテーマにしていたけれど、問題を解決するときには、現場の人の声を聞いて、まわりの人の意見を聞いて、最善な手段で相手に貢献していくということには変わりはないと思う」

生徒は水をきっかけにして持続可能な社会をつくることを考えた。

現在、私は小学校と大学で探究型の授業を行なっている。100%でも気づきと興味が出発点にあることは変わらない。多様な問いから生まれた企てと行動により探究は進む。P D C Aではなく、P Dを繰り返す。2回目のPには前回の反省が含まれる。そして、こうした態度は探究の伴走者である教師にも必要不可欠だ。



## 女性教師はなぜ退職しなければならなかったのか？

—「教員のワーク・ライフ・バランス」と「キャリア教育」をめぐる—

### 1. はじめに

現在「教員の働き方改革」が議論

されています。その目的の一つは教員も「ワーク・ライフ・バランス」が実現

できる働き方ができるようにすることです。その中には、子どもを産み

育てることと仕事を両立させることが含まれます。それは育児介護休業

法や男女雇用機会均等法などによっても保証されています。他方で新学

習指導要領では「キャリア教育」が一層強調されています。両者は一体

のものであるはずなのですが、残念なこと、一部にはそのことに理解がない

学校が存在します。ここではその一例を紹介し、読者の方には是非考えて

頂きたいと思います。

性教師（A先生）が退職した経緯で

す。

A先生は大学卒業後2校目の勤務校での契約専任教諭でした。この学

校の契約専任教諭は、1年毎の更新で最大3年までで、その後は試験な

どを経て正式に専任教諭になる道があります。A先生は2017年度で

3年目を終え、次年度から専任となる予定でした。専任になるためには

秋に実施される専任教職員採用試験を受験しなければなりません。他方

で2017年2月に妊娠が分かり、10月に出産をされました。

2017年度（契約専任教員の契約最終年）の4月下旬に、A先生は

理事長と事務局長から呼ばれ意思確認をされました。A先生は専任採用

試験を受けて継続したい旨を伝えました。妊娠中であって10月末が

出産予定日であることは、それ以前に伝

えていました。理事長からは、「育児

は想像しているより大変であり、勤

務時間に関しての特別考慮もできない、周りの人間の理解を得るのが難

しいため、育児が落ち着いたら戻ってくればよい」という回答がありまし

た。

4月の段階で、専任教職員採用試験の日程が

出産予定日に近く、受験ができないことが確認できていたた

め、5月に入ってから事務の女性にこの件について相談を

しました。この女性には学校で唯一、産休取得後に復

帰した女性でした。相談をした結果は、もう一度専

任教職員採用試験を受験したいと願

い出てみてはどうかということでした。

教職員採用試験を受験してもよいと

いうことであつたので、改めて次年度

4月1日に復帰希望であることを伝えました。A先生は

なぜ急に受験資格を与えたのか不思議に思つたため、

教頭にたずねてみると、事務の女性

が相談を受けた内容を事務局長の耳

に入れたことが分かりました。

6月下旬に改めて理事長などと話

しましたが、その際、専任教職員採用試験の確定

日程と試験内容が記された書面（A4サイズ1枚）と、専

任教職員採用試験の日程変更はできないという「こ

連絡」（A4サイズ1枚）計2枚が手渡されまし

### 2. ある女性教師の経験

ここで取り上げるのはある私立女子中学・高等学校に勤務していた女

子中学・高等学校に勤務していた女

子中学・高等学校に勤務していた女

子中学・高等学校に勤務していた女

あったため、試験を受験できず、次年度から専任教員にはなれないことは明らかでした。

この間、東京労働局雇用環境・均等部や弁護士にも相談しましたが、はかばかしい回答は得られず、結局A先生は10月末に出産後、この年度で退職し別の私立学校へ移りました。

### 3. 学校の姿勢

以上が退職の経緯ですが、この学校ではこれまでも、結婚や妊娠をきっかけに辞める女性教員が多く、A先生が退職した時点で女性教員は全員、独身か子どもがいない人でした。過去の事例でも入校して3年間の契約専任の期間に妊娠された先生方は皆退職しており、産育休を取得し復帰したのは事務職員や司書教諭だけで、授業や担任を受け持っている教員の中にはいませんでした。

私は、6月下旬に示された「ご連絡」の内容が、学校の姿勢を象徴していると考えます。「お互いに誤解のないように、大事なことをお伝えすべく、本書を作成しました」で始まるこの文書では、A先生の契約専任教員の期限が今年度で満了し、次年度以降勤務を続けるには専任教職員採用試験を受けなければならないこと、

A先生が妊娠中であり出産予定日が10月末であることが確認されていた。その上で、試験は毎年決まった時期に行うものであり、複数人が受験するために公平性確保の点からも、「貴殿の主観的事情により日程を変更することは出来ません」としていま

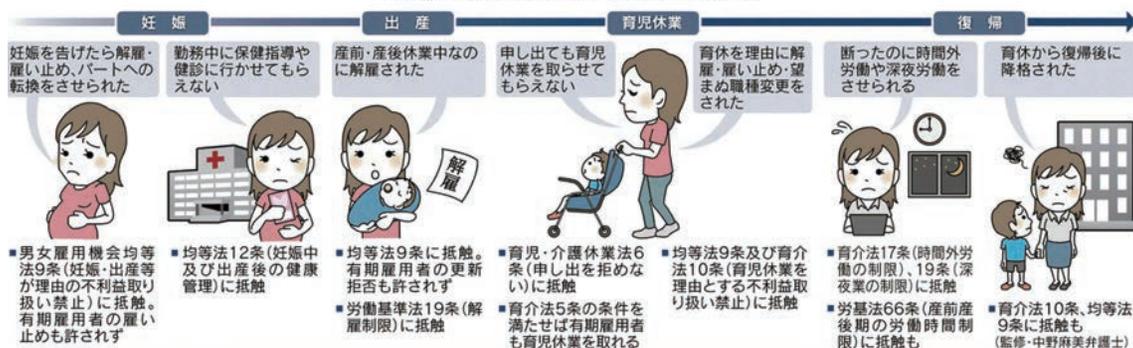
東京労働局や弁護士の立場は、このような学校の対応が直ちに法令違反であるとは言えないというものでした。確かに法的には、妊娠・出産を理由とした「解雇」でも「雇い止め」でもないのかもしれませんが、しかし、専任教職員採用試験を明らかに受験できない日程に設定したことは、少なくとも学校がA先生の雇用の継続のための努力をしていないことを示しています。そして何より、子どもを産むことは「主観的事情」なのではないか。

### 4. おわりに

学校教育の役割の一つは、教師がロールモデルとして生徒の進路・人生選択を助けることにあります。そのためには教師自身が「職業人であると同時に生活者」であることが大切です。

実はこの学校は、「女性のキャリアのための教育」を前面に打ち出している学校です。一方で女性のキャリアを強調しておきながら、他方で教えている先生が妊娠・出産で退職する、そして子育てをしている女性の先生が一人もいない状況から、生徒は何を学ぶでしょうか？私が担当するある授業での学生のコメントに「私の母校は私立女子高である為か、先生たちの育児休暇などが取りやすいように見えました。私もできたら育児の後に仕事を続けたいのでそのような環境が整っている会社をこれから積極的に探したいと思います。」というものがありました。生徒はきちんと見ているのです。子どもを産むことが「個人的事情」ではなく、職場や社会全体で支えるべき、ある意味で公的なライフ・イベントであると伝え、実践することこそ、求められているのではないのでしょうか。職場としての学校で「ワーク・ライフ・バランス」を実現することと、生徒へのキャリア教育は表裏一体のものであるという認識が必要ではないかと考えます。

マタハラは隙間なく禁止・違法とされている



日経電子版 NIKKEI STYLE キャリア 磯哲司「職場の知恵マタハラ、既に法の網 行為防止が新たな焦点」(2015.8.17)

<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO90533830U5A810C1NZBP00/> (2021.12.8 最終確認)



## 「山月記」そして、もう一つのドラマ 〜李徴の思いをカラダで感じてみたい〜

「面白くてためになる授業って？」  
「ワクワクの問いの見つけ方は？」  
「プレイフルでダイブな学びって？」  
そんな声にこたえようと、学生たちと一緒にはじめた「クリエイティブ 国語 授業のつくり方」。今ここでは見えない「ワクワク・ドキドキ」の現場を共有してもらえることを願いつつ、「クリエイティブ・レッスン・イン 国語」舞台裏へのご案内です。

ある日の授業、テキストは高校現代文「山月記」、虎になった李徴の物語です。「詩人になりそねた男が発狂して虎になる」強烈なイメージをもつ学生たちは、こう言いました。「もっと、李徴に迫っていきたくつたのに、読解だけで終わって残念」「李徴の心の声をもっともつと聴きたかった」そんな学生たちの思いを実現すべく始めたのが「謎解き山月記」。

を拾い出し、それをグループでシェアし、グループごとに掘り下げる「謎」を決定。そこからチームごとに「謎解き」ワークが始まります。「山月記」の世界にダイブし、謎の整理と深化を図りながら、登場人物の想いに迫ります。チームの謎解き全体発表を終えた後、「私の謎解き」と称し、李徴の生き方・考え方を自身の問題として文章化し、それを、仲間たちとシェアする、という展開です。

チーム「謎解き」の場面で、学生達は、思いを、気持ち、言葉にし、語り始めるまで、幾度となく言いよどみ、言いなおし、沈黙を繰り返しました。しかし、その沈黙の中から、いつか、必ず声があまれていきました。じつと耳を傾けてくれる仲間たちにはげまされるように、学生たちは、自分の心の奥深くに、潜り込み、再び言葉を模索し、新たな語りをはじめ

ます。沈黙も語り直しも、言いよどみも、それはすべて語り手の思いと深い考察の表れであり、それゆえ、沈黙に耳を傾ける聴き手の存在こそが大きな役割を果たしている、語りの生まれる現場に立ち会った私は、大きく心を揺さぶられます。

「謎解き山月記」が終わったとき、学生がいました。「先生、李徴の声が、聞いてみたいです」「今からここに、李徴をよんでみたいです」「先生、ホット・シーティングやりましょう」「ここから「ホット・シーティング」による李徴との「対話」が始まったのです。

このホット・シーティングとは、「いま、ここで」李徴になった人物が中央の椅子（ホットシート）に座り、仲間からの「問い」に、李徴となつて「こたえる」というドラマ技法です。どんな問いが発せられ、どう答えるか、全く想定不能、筋書きのないドラマ

への挑戦です。「高校時代、私も、李徴の想いをからだで感じてみたかった」そうつぶやいたSの声をうけ、私は学生たちに語ります「では、山月記最後の冒険のはじまりです。今、ここに、李徴が登場したら、みなさんは、どんなことが聞いてみたいですか？聞きたいこと、たくさんあげてみてください、それをグループでシェアし、聞きたいことベスト3を決めて紙にきかだしてみましょう」グループでの問いが決まったところで、いよいよ、「ホット・シーティング」のはじまり。それぞれのグループから登場した李徴がホットシートに座ります。この5人の李徴に対し、同じ「問い」をなげかけ、「李徴」は「問い」に即興で答える。これを3シーン行うことで、全員が「李徴」となつて生きることにチャレンジする、これが、クリエイティブ・レッスンのコア・アクティビティです。

仲間たちが次々に発する問いにこたえた「李徴」の語り、その一部を紹介しましょう。(Q:質問役の学生 R:李徴役の学生)

Q:袁修(えんさん)に会った時、

あなたは、どんなことを思いましたか?

R:驚きました、まさか、出会えるとは思ってなかったから……自分が人間でなくなるまえに、最後に、袁修にあえて、嬉しかった……

Q:どうして嬉しかったのですか?

R:袁修は、私の、唯一の友達だったから。気取っていて、嫌なヤツだった私の話を、一生懸命聴いてくれる人だったから……

Q:袁修に、いろいろなことを語りながら、どんなことを思っていましたか?

R:虎として生きるしかないという事実を、認めたくなかった、でも、虎として生きること、それを、語りながら、受け入れていったような気がします。人間としての自分の思いを、袁修が、最後まで聞いてくれたから、

ありがたかった、うれしかった……

(中略)  
Q:もう一度だけ、人間になれるとしたら、その一度だけの時に何をしたいですか?

R:詩を、世間に発表したい、自分の生きてきた証として……人間としての自分は消えても、

詩さえ残れば、俺は、人間としての私は、生き続けることができるから……

Q:さいごに、山の頂で、虎の姿を見せて咆哮しましたが、その時の気持ちを教えてください。

R:さよなら……さよなら……、袁修への、家族への、そして、人間としての俺との最後の別れだ……

李徴の「さよなら、さよなら」を聞いたとき、教室には、静寂そして、深いため息がもれました。それは、李徴の思いを「からだで感じる」ことができた瞬間でもありました。

「山月記をめぐる冒険」を終えたとき、学生達は何を想ったか、感想を少し紹介しましょう。

仲間との対話、ホット・シーティングでの語り、一つ一つに新鮮な驚きを覚えました。目の前にいる仲間が李徴になって語り始めたとき、からだはゾクツクとしました。「カラダ」を使って「死」や「生」を考えたのは、初めてだったので鳥肌がたちました。

自分では思いつかないようなことを問われ、私の脳にいきなりスイッチが入ったようで、李徴としての自分が、一生懸命言葉を探し、何度も涙がでそうになりました。

実際に自分のカラダで李徴を体験したことは大きかったです。これは、頭で想像するのはちがう次元のものだと思いました。

理性や感情レベルにおける、論理的・抽象的な言葉ではなく、ホット・シーティングという「もうひとつのドラマ」の「語り」だからこそ、人の心を大きく揺り動かしたのかもしれない、そのことを「山月記」実践は鮮やかに示してくれたのです。



ホットシーティングの様子



# 学びにおける豊かさとは？ 〜Web検索を超えて〜

## 1. 現実化しつつあるユビキタス社会

生活環境のありとあらゆる場所にネットワーク環境が埋め込まれ、利用者がそれを意識せずに利用できる社会、いわゆるユビキタス社会の実現が現実味を帯びてきました。もはや私たちの生活はICT抜きで考えることはできません。社会が情報化していく過渡期に青年期を過ごした私は、この短期間における劇的な変化に驚きを覚えます。最近では「Society 5.0」という未来像が掲げられ、人工知能などを活用することで、高度情報化をさらに加速する動きが顕著になっています。

確かに私たちの生活は「便利」になりました。ICTの恩恵をたくさん受けています。他方で、このICT利活用の普及という観点からすれば、学校は時代遅れです。どこまで活用できているかどうかは別にして、日々

の生活の方が明らかに進んでいます。

その点、コロナ禍を契機にして、GIGAスクール構想の実施が前倒しされ、まだまだ課題は山積しているものの、環境整備が充実してきていることは喜ばしいことです。インターネットをユニバーサルサービスに位置づけ、そのアクセスを国民の普遍的な権利（基本的人権）として保障し始めている国があるなか、日本社会全体が、そして、学校もまた対応が迫られていることは言うまでもありません。

## 2. 期待半分、不安半分

これまでもテクノロジーの進化は、カリキュラムや教育方法、教育評価などに大きな影響を与えてきました。ICTがもたらすインパクトも相当なものになると思います。学校教育における学びのあり方はかなり変容するかもしれません。私自身、デジタ

ル好きであり、その潜在的可能性を

それなりに理解しているつもりです。ただ、それでもなお、違和感を抱き、不安を覚えています。つまるところ、それは「本当に考えているのか？」という問いに集約されます。そのきっかけは、生徒や学生たちがデジタルデバイス（パソコン、タブレット、スマホなど）を使っている姿でした。

当初、インターネットを使って自由に調べ学習ができるようになったことを私は素直に喜んでいました。教科書と教師が準備した資料だけに閉じた学びをもっとオープンで探究的な学びに転換できると思ったからです。様々なアプリを使えば、思考や表現、交流の幅を広げ、厚みをもたせることができると思っていました。

その期待の半分はあてはまり、もう半分はあてはまりませんでした。例えば、確かに生徒や学生たちは自分

たちなりに調べます。いや、正確に

えば、調べるといふよりは検索しているのです。ぱっと思いついた素朴な検索ワードでヒットした結果のうち、いくつかを閲覧し、要約します。要約するだけ良い方で、なかには書き写したり、「コピペしたりする子たちもそれなりにいるわけです。考える前に検索し、検索した結果の批判的な吟味

がないままに、分かったつもりになるという習性が、思いのほか身体化されているような気がしてなりません。そうした表面的な理解を互いに共有し合っても学びは深まりません。

## 3. 問題にすべきは情報消費社会

学校教育でICTをどう活用するかという問いを立てると、どうしてかという問いを立ててしまいます。もっと視野を広げ、子どもたちの学校内外におけるメディア接触、さらには言

語生活の現状に目をむける必要があるでしょう。

大人を含めて、私たちは分らないことがあれば、すぐに検索することが癖づいてきています。しかし、Web上の情報は表層的かつ断片的なものが多く、かなり検索語などを工夫して検索しないと深い階層にたどり着くことはできません。また、検索した結果をしっかりと吟味し、相互に関連づけながら考察しないと体系的な理解には至りません。

加えて、SNSの普及に伴い、短文でのやりとりに慣れ親しみ、視覚的な情報に頼ることがかなり多くなりました。Webコンテンツは長さが必要と言われており、提供側も視聴数を稼ぐために「短く、見栄えよくまとめる」ことを意識しています。そうしないと視聴者が飽きてしまい、見てもうえないからです。

総じて、たいして自分の頭を使わずに、大量の情報を消費し続ける生活が大勢を占めていると言え、言わずででしょうか？もし消費的なメディア接触が当たり前になりつつあるのであれば事態は深刻です。例えば、スマホを1日3時間使うと仮定すると年間利用時間は1095時間になります。これは高校1年間の授業時

数に相当するわけです。学校教育よりもメディアからの影響を子どもたちは多く受けることとなります。実際に、消費的なメディア接触の時間が長いほど学習は妨げられ、学力低下をもたらすことが各種調査でも指摘されてきています。

#### 4・創造的なメディア接触に向けて

骨太な深い問いに迫り、良質なインプットをもとに、想像力をフル活用しながら、仲間と一緒に、自分たちの頭と体でじっくりと考え、世界にどっぷりと浸かり探究する。そして、いまだここにはないものを共創し、

豊かに表現する。そのために、どう創造的にメディアを使いこなせるか、そこが鍵を握ると私は考えています。その意味において、教科学習でも総合的な学習／探究の時間でも「探究」することが不可欠です。Web検索で簡単にヒットしないことこそ、学ぶ必要があるので。

テクノロジーがもたらす便利さはプロセスを省略しますが、他方で、豊かさはプロセスに宿ると私は考えています。最小コストと最短ルート、いわゆる省エネで学ぼうとするのではなく、もつと子どもたちが試行錯誤や役割実験を苦しみながらも楽しむこ

とができないだろうか。私の悩みは尽きません。果たして、今、子どもたちはどこまで学習権を享受できているのでしょうか。正直なところ、ICTがなくても／を使わなくてもできることの方が多のですが、その便利さがもたらしてくれる可能性をどう見極めていくか。学びの豊かさこそその身体化を求めて、私のチャレンジは続きます。

#### 【参考文献】

社会教育推進全国協議会(2017)『社会教育・生涯学習ハンドブック(第9版)』、エデル研究所

### 学習権とは、

読み書きの権利であり、

問い続け、深く考える権利であり、

想像し、創造する権利であり、

自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、

あらゆる教育の手だてを得る権利であり、

個人的・集団的力量を発達させる権利である。

学習権宣言1985年3月29日第4回ユネスコ国際成人教育会議採択

社会教育推進全国協議会(2017)より抜粋

## 教育の最新事情

# 中教審答申「令和の日本型学校教育」

(2021年1月26日) を読み解く

### 1. はじめに

この答申は「新しい時代の初等中等教育の在り方について」(2019年4月17日 ちなみにこの年は4月までが平成31年、5月から令和元年)の諮問に対するものです。答申を作成したのは「中央教育審議会・初等中等教育分科会・新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」です。「分科会長」と「部会長」は荒瀬克己(元京都堀川高校長)、中教審会長は渡邊光一郎(第一生命ホールディングス株式会社社長)です(財界人が会長になったのは2009年の三村明夫からです。かつては「財界は教育について口を出すべきではない」と言った財界人がいましたが、そのような気概のある人はもういないようです)。

### 2. 答申について

私がこの答申を最初に見て感じたのは「令和」と「日本型」への違和感でした。元号と国家にこだわる理由は今でも分かりません。そして内容をみて思ったのは、「教材としては使える」ということでした。ちょうど3年生が教員採用試験を始める頃でしたので、準備のための資料として紹介しました。つまり文科省から見た日本の教育の現状と課題が網羅されているのです。しかしこれは裏を返せば「総花的」で「新鮮味」がないということです。本文は90頁以上で、いろいろな言葉が散りばめられて、良いことが書いてあるように思えますが、今後数年の教育行政の基本的方向性が全く見えません。今回の答申の問題は以下の通りだと考えます。

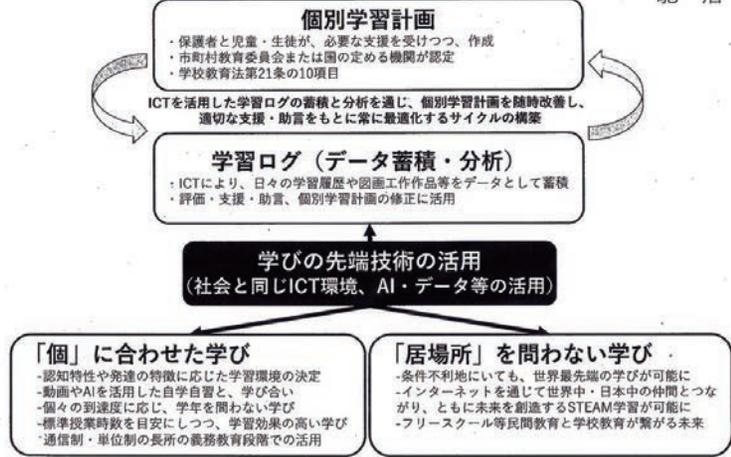
1) 独自性の欠如

答申の一つの「目玉」である「個別最適(な学び)」は、経済産業省の『未来の教室』とEdtec研究会(2017年)で構想されてきたものです。ここでは「民間教育」(塾や予備校など)と「公教育」の壁を取り払い、ICTを最大限に活用することが考えられています(経済産業省は塾などを管轄する官庁)。また、不登校・フリースクールの関係者からも同様の問題提起がなされています(図参照)。「個別最適」が従来からの「個別最適」にどう違うのかということもよく分かりません。今の学校制度を前提としないで議論するという経産省の立場と、今の制度の枠内に入れようとする文科省との立場を強引に合わせたもののようです。

また「履修主義」と「修得主義」については、日本経済団体連合(経団連)の「Society5.0に向けて求められる初等中等教育改革第一次提言」with「ナ時代の教育に求められる取り組み」(2020年7月14日)で、義務教育段階での「修得主義」の考えの重視が提言されています(「修得主義」とは「目標に関して、一定の成果を上げることが求められる」考えであるとされ、所定の教育課程を履修さえすればよいとする「履修主義」と対立するものです)。この主張の背後にあるのは、ICTを活用した「学習の個別最適化」や「学習履歴の管理」によって、個々の子どもに応じた学習が可能になり、一斉授業や「学校に毎日通うこと」自体が無意味になるという判断です。同時に、新学習指導要領が「何ができるようになるか」を重視するのであれば、子どもが一定の知識技能を身につけることを進級や卒業の条件とすることが必要であると考えられます。

さらに高等学校教育の部分は、教

「より多様な普通教育の創出に向けて」試案 夜間中等義務教育拡張議員連盟 超党派フリースクール等議員連盟 馳 浩



馳浩「より多様な普通教育の創出に向けて」試案

超党派フリースクール等議員連盟・夜間中等義務教育拡張議員連

<http://sonohana.blog.jp/archives/18065972.html> (2019.5.16 最終確認)

育再生実行会議第11次提言(2019年5月)の内容と重なっていて、既に高校普通科の「多様化」が検討されています。

「このように見てくると、結局今回の答申で新しいと言えるのは「小学校での教科担任制の一部導入」くらいではないでしょうか。」

2) 問題意識の偏りと「丸投げ」

「この答申には「少人数学級」や「ジェ

ンダー」「性的少数者」が言葉として一度も出てきません(「性同一性障害」「性自認」は各々一か所出てきます)。「いじめ」「不登校」には触れられてはいますが、新しい内容は全くありません。

また文末で、「必要である」が121回、「重要である」が100回、「求められる」が41回、「べきである」が26回、各々出てきます。例えば以下のような一文があります。

3) 歴史的視点の欠如

今回の答申に限ったことではありませんが、ここで描かれている学校教育のかについての歴史的検証・点検が全く見られません。歴史的経緯や現状は第一部で触れられていますが、「日本の教育の成果」や「社会や子どもの変化」が中心で、教育行政や学校教育自体の問題点には殆ど触れ

られたいません。前項と考え合わせると、答申全体が「絵に描いた餅」に終わる可能性は極めて高いと思われます。

3. おわりに

1970年代くらいまでは「中教審路線」という言葉があつて、批判の対象となっていました。その方向性を出していましたが、また教育再生会議が提案した「道徳の教科化」を否定したこともあり(2008年)。しかしもはや中教審には教育行政のあり方を決める力なくなつたと思わざるをえません。経済産業省・総務省・内閣府、あるいは教育再生実行会議等のルートを通じた経済界・教育産業が教育の方向を決めていることは、これまでも指摘されてきましたが、今回も指摘され、まさにそのことを如実に示していると考えられます。

中教審はこの答申に続き、教員のあり方について議論をしています。その中で教員免許更新講習を「発展的に解消」し、研修の履歴を管理職や教育委員会が管理する(罰則つき)のシステムを提案しました。教員を管理しようとする方向は危険であつて、今後の動向に注意が必要です。

# 先輩はもかく、されど進む

## 私立 中学校・高等学校 堀内 夏穂先生（国語科）

専任教諭として働くこと。それは、大学4年生の時に自分が最も望んでいたことでした。しかし、望みを叶えた自分に待っていたのは、経験の無さに苦しむ日々でした。

大学卒業後、現在の勤務校に専任教諭として就職しました。「夢が叶った」という喜びを感じられたのは、ほんの数日間。周りの先生方が忙しく動き回っているなかで、何をすればいいのか戸惑っているなかで、新学期が始まると、「この先生はどんな先生なのか」と探るような視線を向けてくる生徒たち。教育実習ではあれほど楽しかった生徒との関わりが、正直怖いと感じました。そんななか、初めての授業はオンライン授業。顔もわからない生徒へのオンライン授業は、不安で押しつぶされそうになりました。

専任教諭となると、教科のことだけでなく様々な仕事がかかります。学年の仕事、校務の仕事、未経験の競技を指導する部活動。教科のことでさえ勉強不足を感じていた自分に他の仕事への余裕はない、というのが正直なところで、仕事を教えていただくたびに感じる自分の無力さは、悲痛なものでした。

教員2年目となり、初担任に挑戦

することになった今年度。教員経験どころか社会人としてもままならない自分に、担任が務まるのか。自信は全くありませんでした。「どのような学級にしたいのか」。考えても考えてもはつきりとした答えは出ないまま迎えた入学式の日。目の前に現れたのは、義務教育を終え、自分たちで歩んでいくことが求められる41人の立派な大人たちでした。自分がこのクラスをどのようにつくりあげるか、ではなく、41人がどのようなクラスにしていこうを見守ろう、そんな風にラクに考えることができ、少し肩の力を抜くこともできました。

41人の大人たち、とはいえ、やはり親にとっては大切な子どもです。このことを初めて感じたのは、保護者面談を行ったときでした。保護者の方

が、学校での様子を興味深く聞いてくださったり、成績について心配そうに質問してくださったりする姿。また、家庭での様子を楽しそうに話されている姿。高校生は親離れをし、親も子どもへの関心が薄れていく頃、だろうと思っていた自分にとって、子どものことを想い、より深く向き合おうとされている保護者の姿はとても新鮮で、刺激的でした。子どもを育てる親の

想い。この仕事をしていなければ、今

の自分が肌で感じることはできなかったでしょう。初めての保護者面談はとても大変でしたが、改めてこの仕事の魅力に気が付くことのできた期間でもありました。

「私はどんな担任になりたいのだろう」という悩みは、正直今でも尽きません。日頃の出席状況、定期試験や模試における成績、課題の提出状況……。担任となるとクラスのこと、こんなにも心配になるのかと、驚きもあります。また、自分のクラスの雰囲気や成績を周りのクラスと比較しては、「他の先生なら、もっと良い指導ができるのに」と落ち込むことも多くあります。ですが、自分にできることは、当たり前些細なことしかありません。クラスの生徒が元気に登校し、笑顔で下校する姿を見守ること。それぞれ不得意な科目を抱えながら、試験を乗り越え、全員が進級できるよう励ますこと。ただそれだけができれば、担任として十分だと、先輩から教わりました。それだけ、とはいえ、簡単なことではありませんが、自分にできる些細なことを大切に、厳しく言うべきところは指導できる教員になろうと、日々挑んでいます。

2年目になって増えた、初めての仕

事。どれも「うまくできたな」と満足できたことはありません。自分の至らなさを悔やみ、反省するばかりです。しかし、どれほど落ち込んで、また翌日元気に出勤しようと思えるのは、毎日笑顔で迎えてくれる生徒がいるからです。高校は、担任とはいえクラスの生徒と過ごすことのできる時間が限られてしまいます。そういったなかで、毎日行う朝礼が、私のエネルギーチャージの場です。一人ひとりと会話を交わしながらクラスで過ごすたった10分の時間が、かけがえのない時間となっています。また、それができるのは、専任教諭として働き、担任を持つことができる教員の特権だと感じています。

落ち込んで立ち直る日々を繰り返し、気が付いたら初担任も後半戦。ただ目の前のことに必死な自分のもとに、昨年度授業を担当していた現高3の生徒が尋ねてきました。「指定校推薦が通った！」と報告をしに来てくれた彼女は、「学校の勉強を頑張ることができたのは、昨年、先生が古典の授業をもってくれたおかげ！」と満面の笑みで言ってくれました。出会ったときは「古典は大っ嫌い」とばかり言っていた彼女。いつしか毎授業しっかりと取り組むようになり、テストで

は毎回9割を取っていました。「先生の授業だから、頑張れる」。その一言と懸命に努力する姿に、私自身どれほど励まされたでしょうか。他の先生と比べ、良い授業、ができないとしても、50分間一生懸命に向き合う姿を見てくれる生徒はいるのだと、教員になつて初めて実感できました。そして、たった1年の関わりに過ぎなかった自分のもとへ彼女が報告しに来てくれたことは、教員として幸せな瞬間を体験できた、忘れられない出来事となりました。

中学生の頃からの夢であった、教員という職業。思い描いていたものよりも現実は厳しく、壮絶な日々を過ごしているかもしれません。もう少し経験を積んでから専任になるべきだったという後悔も、絶えません。ですが、どれほど苦しい毎日でも、励まし、支えてくれる生徒というかけがえのない存在がいます。その生徒たちと、挑み続けることができる私は、やはり恵まれた環境で教員になれたのだと感じています。目の前の生徒を失わないよう、しっかりと向き合い、ひたすら挑戦していくこと。それが、私の今の目標です。





昭和女子大学現代教育研究所  
Institute of Modern Education  
Showa Women's University

## 現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認という

### 二つのテーマを柱とした研究所です。

現代教育研究所は、現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認を目的とした研究所です。総合学園として学内のネットワークを構築するとともに、学外の研究者、教育関係者はもとより、様々な教育機関や研究機関と広く連携を図り、研究成果や提言の発信を行っていきます。学園内外でのネットワークを深め、時代の流れに敏感でありつつ、それに流されることなく教育について自由闊達に議論考察を行い発信する拠点としたいと考えます。

**WEBSITE** : <http://iome.jp/>    **MAIL** : [kyoikuken@swu.ac.jp](mailto:kyoikuken@swu.ac.jp)

昭和女子大学教職課程研究報

**EduMate**  
vol.6

■編集■

EduMate 編集部

■発行■

昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■

2022年3月2日